

共生日本語教育実習を実習生は どのように経験するのか —内省レポートにもとづいて—

岡村 郁子・清水 寿子・古市 由美子

1. はじめに

現在、大学・大学院における日本語教員養成課程では、「日本語教育実習」は、養成課程の要として位置づけられ、それぞれの機関の教育理念に従って実施されている。また、教師教育のパラダイムが「トレーニング型」から内省に基づく「教師成長型」へと転換され（岡崎・岡崎 1997）、自己研修型教師を視座におくことが重要になっている。では、実習授業の受講によって、実習生はどのような実践的能力を身につけ、どのような自己成長をしているのだろうか。こうした視点に立つ研究は、中川（2005）に見られるように始まったばかりで、十分に明らかにされているとは言えない。

一方、近年国内における日本語教育では、多言語多文化共生のための日本語教育（以下共生日本語教育と記す）が期待されるようになってきた（岡崎 2004、山田 2005）。しかしながら、新たな日本語教育として提起されて日の浅い共生日本語教育においては、教育実習自体も始まったばかりであり、実習生がそこで何を得ているのか、全く明らかになっていない。

そこで本研究では、共生日本語教育を標榜する教員養成を取り上げ、共生日本語教育実習過程における実習生の学びを個々の内省から探る。具体的には、実習生が主に実習準備期間中に授業の内省として書いたレポートのテキスト分析を行い、実習生の属性に注目しながら、それぞれの学びの特徴を明らかにする。そのために、①実習生は、実習過程において何を学んでいるのか。②実習生の学びは、属性によって異同があるのか。以上、2点を研究課題とする。

2. 研究方法

2.1 対象者

調査の対象となったのは、某国立大学大学院日本語教育コースで2005年度7月から8月にかけての8日間に行われた日本語教育実習である。本実習は「多言語多文化社会を切り開く日本語教育」を標榜し、共生日本語を用いて母語話者と非母語話者との共生を目指すものである。実習生は準備期間・実習中を通じて協働でプログラムを創造し、チームティーチング（以下、TT）で行った。と同時に、「教師成長型の内省モデル」に基づいてそれぞれ自分に合った学びを得ることが奨励され、常に内省することが求められた。

実習生は大学院日本語教育コースの修士一年の17名で、内訳は日本語非母語話者6名・母語話者が11名である。本研究では、正規の日本語教育機関での教育経験がある人を経験者・それ以外を未経験者とし、実習生を4つの属性に分けて分析を試みた。すなわち、非母語話者未経験者（以下NNS未経験者）、非母語話者経験者（以下NNS経験者）、母語話者未経験者（以下NS未経験者）、母語話者経験者（以下NS経験者）の4つである。

教壇実習は、年少者と成人向けの二つのクラスが特設され、どちらのクラスも大学近辺の母語話者住民と非母語話者住民を参加者として公募し、同大学の敷地内で行われた。

2.2 分析データ

分析に用いたテキストは「内省レポート」と呼ばれるもので、週1回の教育実習準備の授業内に実習担当教官に提出され、教育実習生間でも閲覧が可能になっている。2005年2月（入学前）の書き始めから7月までの実習準備期間の内省レポートと実習終了後の最終レポートを分析対象とした。

2.3 分析方法

実習生が実習過程において何を学んでいるのか、また実習生の学びは属性によって何が異なるのかを調査するために、内省レポート（A4用紙で314枚）を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTAとする）を援用して分析を行った。GTAは社会調査や数量的研究と異なり、サンプルが代表性を表すという視点がないため、NNS未経験者が4名、NNS経験者が2名、NS未経験者5名、NS経験者6名と人数差があるが、問題ないものとする（木下 2003）。

3. 結果と考察

GTAでは質的データの解釈が中心となるため、結果と考察をまとめて報告する。以下、〈 〉はカテゴリ、「 」は概念を示し、《 》はその属性に現れた学びの特徴を示す。

3.1 学びの内容

内省レポートをGTAを援用して分析した結果、学びの内容は以下の4つのカテゴリに分類された。その4つとは、〈①共生理念〉〈②協働実践〉〈③自己認知〉〈④他者認知〉である。

〈①共生理念〉では、本実習の理念である多言語多文化共生をめぐる気づきや学び、理念のとらえ方、及び日本語教師の役割について東ねた。多くの実習生が理念の曖昧さや実現性への懐疑に言及し、葛藤しながら自分なりの実習目的を探す記述が見られた。〈②協働実践〉では、実習の内容を決める話し合いについての言及やTTやといった、準備段階から教壇実習を通じてなされる協働に関する記述である。TTでの学びや不安、話し合いを評価する記述が現われた。〈③自己認知〉は、自分の経験や変容などを内省する、内面に向かう自己認知に関するものである。不安を吐露したり、また理想を述べるなど、自己にまつわる省察がとらえられた。〈④他者認知〉で東ねたものは、実習生仲間や募集して集めた実習参加者、実習経験者である先輩などの他者や読んだ本など、他者や外部からの学び・気づきを受けて記述された外部からの刺激による認知に関するものである。以上の4つのカテゴリは、実習生に共通してみられたものであり、内省レポートを構成する中心的な要素である。

3.2 属性別の学び

ここでは、3.1の分析で生じた各カテゴリ（①共生理念）〈②協働実践〉〈③自己認知〉〈④他者認知〉に、属性別の学びがどのように現われているのかを、NNS未経験者、NNS経験者、NS未経験者、NS経験者の属性ごとに検討する。表は、各カテゴリに生じた属性別の学びをまとめたものである。縦に属性を、横にカテゴリを配置した。属性により特徴的に現われた項目は下線付きで、強い問題意識を持ってとらえられているものは斜体で表した。以下、属性ごとに見てゆく。

まず、NNS未経験者の学びを検討する。カテゴリ〈①共生理念〉での学びは、《期待と希望》といえる。他の属性の実習生と比較して、多文化多言語共生社会実現への期待が強く現れている。また、「NNS教師としての役割」や「母国や母語の再評価」という概念は、NNS未経験者しかみられない。

〈②協働実践〉におけるNNS未経験者の学びの特色は、《学びと自己反省》にある。協働の利点を認め、話し合いに有効性を見出し、TTから多くを学ぶ一方、協働の中で自己を反省的に見つめる記述が多く見られた。〈③自己認知〉では、未経験者のNS・NNSともに《理想と現実の葛藤》が特徴的に現われている。自身への不安を強く感じ、理想的な自己のイメージを述べると共に自己観察を行っており、自己の変容についての記述も多く見られた。

〈④他者認知〉では、NNS未経験者には《仲間からの学び》に関する記述が多い。実習生仲間からの刺激による気づきから学びがあったことが窺える。

次に、NNS経験者の学びを考察する。〈①共生理念〉で特徴的なものは、《母国における日本語教師の役割の振り返り》であり、日本語教師経験者として、母国での教師の役割に照らして、多文化多言語共生の理念に自分なりの解釈を行っている。〈②協働実践〉におけるNNS経験者の学びは《不安と難しさ》で表され、協働の利点を認めながらも、経験の少ないTTに対する不安を持ち、協働の難しさを強く感じている記述が見られた。〈③自己認知〉では《教師としての自己成長》についての言及が特徴的で、母国での教師としての自分を振り返り、実習を通して変容し、成長していく自己について述べていた。〈④他者認知〉では、NNS・NSともに経験者は、実習参加者や先輩、本など、《外部からの学

び)について多く言及している。

そして、NS 未経験者の学びは〈①共生理念〉カテゴリーでは《懷疑と希望》という点にまとめられる。共生社会実現に対する懷疑を抱きながらも、NNS 未経験者同様に実習に希望を見出し、取り組んでいることが特徴である。〈②協働実践〉でのこの属性の特徴は《意欲と自己反省》で、話し合いに大いに意欲を持って参加する反面、話し合いの後に反省的な内省を重ねる傾向が見られた。〈③自己認知〉では、未経験者の NNS の学び同様、《理想と現実の葛藤》が概念から浮かび上がった。不安を強

く感じつつも、理想的な自己イメージや変容する自己について述べ、省察的な態度での記述が現われた。

〈④他者認知〉では、NS 未経験者は仲間をもっと知りたいという《実習生仲間への志向性》についての記述が多く挙げられた。未経験者からは、仲間から多くを学ぼうとする傾向が見られた。

最後に、NS 経験者の特徴をまとめてみたい。〈①共生理念〉では《懷疑と矛盾》を強く持っていた。これまでの教師経験から、多文化多言語共生社会実現への懷疑を強く感じつつ、理念と現実の実践の矛盾について指摘する記述が多く見られた。〈②

表 属性別に見た実習生の学び

	①共生理念	②協働実践	③自己認知	④他者認知
NNS 未経験 (4)	<p>《期待と希望》</p> <p>理念の曖昧さ 理念の自己解釈 共生社会実現への期待 理念と実践の矛盾 実習への希望 実習での目的探し 共生日本語教師の役割 規範的な日本語教師の役割 NNS 教師の役割 母国と母語の再評価</p>	<p>《学びと自己反省》</p> <p>TT からの学び 協働の利点 話し合いの有効性 話し合いに対する自己反省</p>	<p>《理想と現実の葛藤》</p> <p>自己不安 自己変容 理想的な自己への課題 自己観察</p>	<p>《仲間からの学び》</p> <p>本などの引用 先輩実習生からの学び 実習生仲間からの学び 実習生の仲間意識 参加者からの学び 参加者決定をめぐる気づき</p>
NNS 経験 (2)	<p>《母国における教師の役割の振り返り》</p> <p>理念の曖昧さ 実習での目的探し 共生日本語教師の役割 母国における日本語教師の役割</p>	<p>《不安と難しさ》</p> <p>TT の意義探し TT への不安 協働の利点 協働の難しさ 話し合いに対する他者への提言</p>	<p>《教師としての自己成長》</p> <p>自己変容 教師としての経験の再評価</p>	<p>《外部からの学び》</p> <p>本などの引用 先輩実習生からの学び 参加者決定をめぐる気づき</p>
NS 未経験 (5)	<p>《懷疑と希望》</p> <p>理念の曖昧さ 共生社会実現への懷疑 理念の自己解釈 理念と実践の矛盾 実習への希望 実習での目的探し 共生日本語教師の役割 規範的な日本語教師の役割</p>	<p>《意欲と自己反省》</p> <p>TT の意義探し 協働の利点 話し合いに対する自己反省 話し合いへの意欲</p>	<p>《理想と現実の葛藤》</p> <p>自己不安 自己変容 理想的な自己への課題 自己観察 体力と気力</p>	<p>《実習生仲間への志向性》</p> <p>本などの引用 先輩実習生からの学び 実習生の多様性 実習生仲間からの学び 実習生の仲間意識 実習生仲間への志向性 参加者からの学び 参加者決定をめぐる気づき</p>
NS 経験 (6)	<p>《懷疑と矛盾》</p> <p>理念の曖昧さ 共生社会実現への懷疑 理念の自己解釈 理念と実践の矛盾 実習での目的探し 共生日本語教師の役割</p>	<p>《非効率からの学び》</p> <p>TT からの学び TT への不安 協働の利点 協働の難しさ 話し合いの有効性 話し合いに対する自己反省 話し合いに対する他者への提言 話し合いの非効率性</p>	<p>《経験の再評価》</p> <p>自己変容 教師としての経験の再評価 自分の位置づけ 経験に基づく高い理想 体力と気力</p>	<p>《外部からの学び》</p> <p>本などの引用 先輩実習生からの学び 実習生の多様性 実習生の仲間意識 参加者からの学び 参加者決定をめぐる気づき</p>

協働実践)に関して、NS 経験者は《非効率からの学び》の記述が多い。ともすれば非効率に陥る話し合いに疑問を感じ、また初めての経験である TT に対する不安を抱くなど、協働の難しさを指摘している。しかし同時に協働の意義を認め、TT からも多くのことを学んでいた。この属性の〈③自己認知〉では《経験の再評価》に結びつく概念が多い。これまでの教師経験や社会での経験を踏まえ、新しい形の日本語教育に臨む自分の位置づけや、経験の再評価を行っている。経験者であるがゆえに高い理想を持ち、そのために葛藤を繰り返すこともこの属性の学びの特徴といえる。なお、気力や体力への言及は NS 経験者・未経験者に共通してみられた。〈④他者認知〉では、NNS 経験者同様、実習参加者や先輩、本など、《外部からの学び》について多く言及している。

4. まとめと今後の課題

共生日本語教育を標榜する教員養成を取り上げ、実習生が何を学ぶのかを内省レポートのテキスト分析を行った結果、以下のことがわかった。

第 1 に、実習生は〈①共生理念〉〈②協働実践〉〈③自己認知〉〈④他者認知〉の 4 つのカテゴリーにわたって学びを得ていたことが明らかになった。第 2 に、非母語話者あるいは母語話者、経験者あるいは未経験者といった実習生の属性により、学びの内容に差異が見られることが示唆された。このように実習生は同じ教育実習を経験していても、決まった内容を一律に学ぶのではなく、それぞれの経験や目標に合わせて多様な学びを得ていることが示唆さ

れた。

本研究は実習準備期間中に注目して、実習生の属性別に分析したが、今後は教壇実習の授業における学びについて調査していきたい。

参考文献

- 朝倉淳子(1999)「日本語教育実習生のダイアリー・スタディ調査」『龍谷大学国際センター研究年報』第 8 号 PP17-28
- 岡崎敏雄・岡崎 眸 (1997) 『日本語教育の実習—理論と実践—』アルク
- 岡崎眸 (2004) 「『共生言語としての日本語』教育実習が可能にしたこと」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究 日本語教育実習を振り返る』H16年度科学研究費補助金研究 基盤B-2 研究成果報告書 PP94-99
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 中川良雄 (2005) 「日本語教育実習の理念と実習生の態度変容」『研究論叢』第65号 京都外国語大学 PP121-131
- 野々口ちとせ(2002)「非母語話者実習生の自己受容：内省モデルに基づく教育実習の場合」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』平成 11~13 年度科学研究費補助金研究 (基盤(C)(2)研究) 研究成果報告書 PP147-157
- 古市由美子 (2005) 「多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」『小出記念日本語教育研究会論文集』13 号 PP23-38
- 山田泉・尾崎明人・新矢麻紀子・米勢治子 (2005) 「多文化共生社会と日本語教育」日本語教育学春発表大会 予稿集 P225-235

おかむら いくこ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
okamura1231@aol.com

しみず としこ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
tracitos@qj9.so-net.ne.jp

ふるいち ゆみこ／フェリス女学院大学 (非常勤講師)
furu-y@imail.plala.or.jp